# 「六郷満山峰入行」同行体験
## バスツァーに参加して

市野瀬　仁
（会員・佐伯市長島町）

### 峰入行者の動向

国東六郷の中に天台寺院が三十三カ寺ほどある。今回巡拝できる寺は二十六カ寺で、コースからはずれている七寺は立ち寄れない。それでも権現社・岩屋など加えて六十三カ所の霊場を回る。

一月七日、千灯寺・今熊豪宏師の協力を得て、豊後高田市郷土研究会の会員の先導で、夷谷（えびすだに）から大藤岩屋への試行をした。途中枯れ竹が道を塞ぎ、難行苦行であったが、至る所にイノシシ道があり助けられた。

今回、八ケ所ぐらいの新しい霊場が平成の峰入りに加えられることが、先の満山会「峰入り行打合会」で承認されたことは誠に喜ばしいことである。

峰入りでは参加者全員が白装束に頭巾（ずきん）、ワラジばき、手に錫杖（しゃくじょう）といういでたちで身を固め、峰々や山々を巡り、本寺や岩屋など六十三カ所の霊場を回る。霊場では、経を唱えて五穀豊じょうや恒久平和などを祈る。踏破する距離は約百五十キロ。

一行は三十日午前八時半、豊後高田市の熊野磨崖仏前で開白護摩を行い八カ寺を巡り長安寺に泊まる。三十一日は天念寺から始まり岩戸寺で宿泊。四月一日は大聖寺から始まり国東町の興導寺に泊まり、最終日は両子寺に

到着した峰入僧と心経を読誦する

到達し、翌三日朝結願護摩で終わる（大分合同新聞要約）。

私達、同行体験バスツアーは、行者僧と共に寺で般若心経をあげて、次の寺へバスで行き、行者の来るのを待つ。寺と寺の距離の如何によっては、希望者も僧行者と一緒に歩く。これが大へんの救いであった。詩ができ、俳句が生まれ、短歌のヒントを書き綴る絶好の時間でもあった。この間の風景を稚拙な俳句で紹介する。

少年少女を中にして寺に着いた峰入僧

巡礼の田圃の小径風うまし

巡礼に難聴の翁仲のよし

峰入りのしんがりに従き異国人

峰行に少年少女を中にて

峰入りの接待待つや里の主婦

たたずめる傘寿の女花菜畑

## 同行ツアー十キロを歩く

十キロの行程の行者と共に七名が歩いた。私達はバスで瑠璃光寺（安岐町）へと向かった。皆バスを降りた。寺は田圃の中を抜けて、幾段もある畑を縫って通る人家の少ない所であった。尼さんに似た住職が、説教ずれした説明を聞いたが、あまり好感しなかった。

待つこと久し、予定を二時間程過ぎても一行は姿を見せない。遙か前方の高い山は水平線となり、牧場であろう牛の数頭が見える。視界が広く、すばらしい景色の山村である。待つ身には寒さが忍び寄ってくる。焚火を囲む人、家の中に入る人、ＮＨＫやＯＢＳのカメラマン等のレンズをのぞく人。「ああ見えたぞ見えたぞ……」と

いう声。一同拍手で迎え、行者と共に般若心経をあげて、バスの待つ道へ下がった。七名の有志も無事バスに乗り、両子寺へと走った。

行者はまた歩いて両子寺に参る。行者の先達が道に迷った為に遅れたことを告げお詫びした。両子寺からの帰りに落伍者の一名と出会ったので、全員バスから降りて激励して見送った。両子寺に着いたのは夜十時四十五分であったという。

無数の古塔群を一巡する

## 宿泊の思い出

峰入行者と同じく、同行ツアーの一日もつらいことが多い。たいてい宿に着くのは六時を過ぎているので、食膳につくのも遅くなる。朝食もたいてい七時。特にお風呂が一つしかなかった宿は忘れられない思い出もあった。

食事には必ず一枚の小さな紙が食膳に置かれている。千灯寺の住職今熊豪正法印の拍子木の合図で一同食前観食後観を読み上げる。

食　前　観

われ今幸いに、仏祖の加護と衆生の恩恵によってこの清き食を受く、つつしんで食の来由をたずねて味の濃淡を問わず、その功徳を念じて品の多少をえらばし。

「いただきます」

食　後　観

われ今この清き食を終りて、心ゆたかに力身に満つ、願わくばこの心身を捧げて己が業にいそしみ、誓って四恩に報い奉らん。

「ごちそうさま」

たいていの人が食事中拍子木が鳴り、食後観を全員で読み上げる。今熊豪正法印によると、

「私達は修業中から食事が早いのです。私も苦労しました。しかし皆さん、これは一応の区切りですから。後はゆっくり召し上がって結構です」

と話された。

ある晩、私が遅くなったため、法印さん方の席の空いた座につかねばならなかった。その時、食後観の読誦が終った時には、二人の法印さんも食事も終り、すぐ席をはずした。高齢による為か習慣になっているのかちょっと考えさせられた。これも折り目切り目があって、普通の旅行と違った良さがあり、気が締まってくる。

こうして四泊もすれば同室の人とは親しくなり、他室の人とも話す間柄となる。

## 最終日の巡礼

初日の熊野磨崖仏の開白護摩は雨に打たれたうえ遅刻したので、儀式の全部は見られなかった。しかし、翌日から最終日までの天候は良く、両子寺の結願護摩では終始拝見することが出来た。東西南北に弓矢の放たれた四至といわれる僧の雄姿は、密教的な光景であった。四日間、一五〇キロを踏破した修業僧は完成の歓びにひたると共に、先輩のことを思ったであろう。更に前途への決意が肚の底から湧き上がってきたのではあるまいか。

私達一行は修業僧を中に入れ紀念写真を撮り、宇佐神宮向けて出発した。

感動を呼ぶ虫封じのシーン

この宇佐神宮参拝は、六郷満山峰入り行事前の二十九日に峰入僧等が、宇佐神宮と御許山に行事の安全祈願をしたそのお礼を申し上げるためのものであったと解釈してもよいであろう。

参拝が終り、ここで昼食をとった。弁当の箸袋に漱石の俳句がある。さすが全国八幡総本宮宇佐八幡参拝記念にふさわしいアイデアである。私の俳句と列記してみる。笑っても叱る人はいないだろう。

巡礼の一寺残して宇佐の宮　　漱　石

神かけて祈る恋なし宇佐の春

速見郡日出町に仁門菩薩が名付けという三十三番の願成就寺に参拝する。この寺は「赤松の妙見さま」で知られ、二月十一日大祭の結願に「火渡りの儀式」の伝統行事がある。国道十号線に沿って右杵築・大分空港へ、直進宇佐・中津の分岐点である。ここを通るたびに、私達は今回の峰入同行を思い出すことであろう。

いっさいの行事が無事終る。大分交通の世話人帯刀(たてわき)和男氏の計いで、三十三カ寺のスタンプを押した「国東六郷満山霊場巡り宝印帳」をその名もふさわしい願成寺で返却して戴き、全ての人々に感謝の意を込めて一応解散となった。

## 忘れえぬ人々

私達四泊五日の同行者三十四名の出身地は次の通りである。

県外―福岡県（九）・東京都（三）・広島（二）・京都（一）

県内―大分市（七）・別府市（五）・湯布院町（三）・国東郡（二）・豊後高田市（一）・佐伯市（一）

日帰りコースの人々は、大分・別府が多く、日毎に人が変わって来るらしく、人数およそ五十名。

四泊五日の中でも忘れられない、思い出の人々を挙げてみよう。この中で八十三歳になる方が三名いた。東京都の二人（男）、福岡の人（女）、三人とも「つれあい」が亡くなり独り暮らしである。

東京都の桜井さんは、娘さんが付き添っていた。この方は七十五、六歳位に見える人で立派な紳士。娘さんの話によると、健康には万全の注意をはらう生活で、今度も前もって人間ドックに行ってきたという。食事・運動

はなんでも独りでする。物を作って人にやったり、話し好きである。

「羽田空港に行くと、誰か同行の人がいるに違いないといって、高い杖を持った長瀬さんという方を見つけたんですよ」

と言う。

長瀬さんという方は、いつもにこにこして、風のまにまに歩くといった感じの人。私が話しかけると、

「ええ。私は自分のことより他人の幸せを願っているんですよ」

と。

この二人の共通している点は、補聴器をかけていること。姿勢が良いこと。若く見えること。そして、妻を亡くしてこんな道に入るようになったということである。

北九州市から来た山田さん（女）は、腰がやや曲がっているうえに、首が極端に前に出て、杖を頼りに歩くので、八十歳は過ぎていると一見感ぜられる。その上片目が充血している。話しかけると、

「私は子供も亡くしました。だから亡くなった夫の証券会社の仕事をやらねばいけないのです。私はねぇ。本を読むことと画家と付き合ったことがあるくらいなの」

そう言ったこの人は、杖をついて歩くことでは決して人に遅れはとらない。こんなことがあった。

この道中、こんな声がかかった。

「十キロの距離ですが、行者と歩きたい方はどうぞ」

と。

すると、これに七名の方が参加した。その時、山田さんが（平坦な道なら私も歩いてみよう）と、独り言のように言って参加した。

また、行者が遅れて二時間ばかりお寺で待ったことがあった。その間、彼女は（風邪を引いてはいけない）と思って、何人かの人と家の中に入っていた。私も後から入った処、彼女は一向に腰を下ろそうとしない。つっ立ったままである。そういえばこんなこともあった。大抵の人は、昼食を待つ時間室内で談合しているが、山田さんはベランダに出て写真を撮っていた。気丈夫というか強靱な意志を持った人であった。

京都市から来た田中さん（七十七歳）は小柄な人で、独立派に属する画家。

「京都もねぇ無住の寺があるんですよ。私は僧侶の資

格をとったので、週に二、三回は僧侶になるんですよ」と言う。

歯は抜けているが気にもしないふうで、いつも上品なバックを手にして離さなかった。

最終の願就寺

猪股麟太郎さん（豊後高田市・六十七歳）は、大分師範学校を卒業して四年間教職にあった。昨年同級会が佐伯であったとのこと。猪股さんは教職にある時、ある知人から大阪の大丸デパートに関係のある会社にスカウトされて、定年まで大阪で生活したそうである。

この人は、今回の五日間に一千句の俳句を作ることに願をかけた。一日に二百句を作らねばならない。まさに超人的な行である。同行中、よく立ち止まってノートしていた。（何をしているのかな）と思って、宿で話をしていてその疑問は解けた。

「俳句を始めたのは父がやっていたのでその影響。そう小学校の六年生の頃でした。

大阪に出て高浜虚子の流れをくむ山口誓子の膝下で学びました。退職して「くにさき吟行会」を結成。会員十一人の世話人をしています。月二回の吟行。二ケ月に一回『句集』を発行。これまで一八三カ所を歩きました」

と言う。

堂々たる体軀で、師範学校では柔道をやっていたという。先の第二次世界大戦では野砲の兵士であったが、長崎で被爆。現在月三万円弱の障害年金を受給していると

いうことである。

私の注文に応えて、初日―中頃―最終の五句を提供して貰った。

峰入り
春雷の兜巾ぞろいとなりにけり
地より湧き地を這ふ涅槃護摩の煙

猪股国直

蝌蚪生る下生の仏数知れず
入峯行血と血つながる思ひかな

わが願の一千句成る結願日

（註）　蝌蚪……おたまじゃくし

別府市の和泉　徹さん（七十歳）は、佐伯市の県税事務所に勤められたことがある。佐伯市船頭町の親子剣道七段で知られる高橋　剛さんの知り合いで剣道の達人。居合もできる。

和泉さんは定年退職して以来、人のやらない事をやって余生を充実しようと、万寿寺に行って大般若経六百巻を写真に撮り写経を始めた。

昭和五十三年から始めて四百巻までこぎつけ、自分の身長一・七〇メートルとほぼ同じ高さとなった。一年五十巻書いて十二年、四十巻書いて十五年の計算になる。一日に約三時間はかかる。この間、旅行したり、病気でもしたら倍加してくるので気が抜けない。今のところ、これから五、六年はかかりそうだとおっしゃる。息の長い仕事で、日本人ばなれしたスケールの大きい事業である。

この方、片肺の一部を切除している上、初期の胃癌であったらしく、三分の二を除去している。それでいて日本アルプスの二峰を踏破しているという。（人間の身体ももつものですなぁ）と述懐している。

「何年もかかって写経して、何か変わったことはありませんか」

と尋ねると、

「そうですねぇ。ストレスがありませんですねぇ」

と。

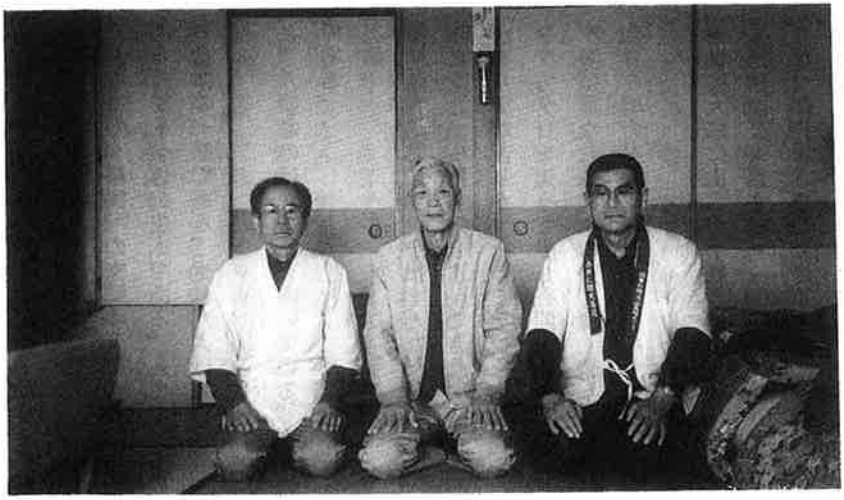
夜の食事で一合ばかりの酒をおいしそうに飲んで、楽しく語っているのを見ると、（この人長生きするだろうなぁ）と思った。

この度の一行中、般若心経を各寺に納経している人は和泉さんただ一人であった。

四泊とも三人で同室した。この二方のことは、私にとって一生忘れられない思い出として残ることだろう。

実は、私も古希の手習いで一年前から独りで俳句を始め、毛筆を手にし始めているところであるが、まだまだ二人の域に達するには時間がかかりそうである。

ともあれ奇特な方々に出会ったものである。どうでも大分交通の世話役、帯刀和男次長にお礼を申さねばと思っている。



（右）俳人の猪股麟太郎氏
（中）大般若心経を写経する和泉徹氏
（左）筆　者